

現在イスラム研究シリーズ（２）

# 創造主を求めて

Dr, A・H・EL-Samny

アリー・ハサン・アリー・エルサムニー

（エジプト・アインシャムス大学文学博士）



慈愛あまねき神の御名において

一言ってやれ、「天と地の間にあるものを見よ。」しかし、みしるしも警告も信じない民には何の役にも立たない

(コーラン第10章ユーニス第101節)

一天と地にあるいかに多くのみしるしのそばを、彼らは顔をそむけつつ通り過ぎることか。

(コーラン第12章ユースフ第105節)

(1)

イスラムのお話をするにあたって、先ずある男の人の話をしましょう。この男の人は、日常の複雑な仕事から解放された夏休みをどのように過ごすかに就いて考えた結果、ハワイへ旅行しようと思いたちました。そこには美しい景色や汚れのない自然が待っているにちがいないと思ったのです。そこで準備を整えて出発の日を定め、又航空会社に連絡して航空券を求め、たゞ出発の時間を待つばかりになりました。

そこで出発の日が来て、彼は荷物を持って空港へ行き、飛行機の出発時刻表を見て、自分の乗る便の番号とか出発時刻の掲示を探したのですが、驚いたことに彼は自分の乗る便について全くそれらを見付けることができなかつたのです。そこで彼はすぐにその航空会社のカウンターへ行ってたずねたのですが、その便は今日突然の飛行機の故障により取り消されて、出発は又別の日になるということでした。そこで彼は止むなく又家へ帰らなければなりません。こうして彼の予定は全く狂い、大変残念に思ったのでした。もしこのような事情を前以て知っていたならば彼は急いで空港へ出かけることもなか

ったでしょう。

こゝで私達が考えなければならないことは、彼は何故自分の希望を果すことができなかつたのか、ということです(勿論理由は航空機の故障としてはっきりしていますが)。そこで私達は、彼が色々と準備をした以外に、何かこの世の中に別の力が働いていることを考えずにはおれません。即ち彼が旅行の手筈を整えた背後に、何か別の強力な力が働いているのではないかと考えるのです。

皆さん、私がこゝで云いました何か別の「力」 - 即ちこの旅行をおくらせ、彼の予定を変えさせた力について私達はよく考えてみなければなりません。そこでコーランには、「だが、神が望みたもうた時でなければ、お前達は望む事はできない。神は全知の方、慈愛の方である。」(第76運命、30)

## (2)

次には又別の例を挙げましょう。こゝに両親が居て、息子をぜひ教師にしたいと考えました。息子も、学生達が自分達の先生を常に尊敬し、又先生は一般の社会で目置かれる存在であることも考えて、両親の希望にそっ

てぜひ先生になりたいと思いました。このために彼はよく勉強し、勉学にいそしみ、様々の学科の授業にはまじめに出席して試験を受けていました。しかし或る試験で、殆んど彼は答案を書くことができず、たゞ二、三行を書いただけで、到底これでは先生になれるような成績を収めることができないような事態が起ったのです。当然の結果として彼は落第しましたが、しかし彼はそれにもめげず、何とか自分の思い通りの道を歩みたいと思い、再び勉強をやり直し、次の年再び試験場へ向ったのです。しかし又この年も又前年と同様の結果となって試験に失敗しました。しかし彼はそれにもめげずさらに第3回目の試練に挑んだのです。しかしその結果は不幸にも何ら前の2年と異なるところはありませんでした。失意のうちに彼はこの国の定めるところに従って学業を投げうたざるを得なくなり、こうして彼は当初の予定がくずれ、自分の考えた道は閉ざされて、希望は失われたのです。

そしてその後彼は今まで自分が考えても見なかったような道に入りますが、それは宗教の学科の試験委員の一人が、彼が試験の時にコーランの暗唱が大変上手なことに目をつけて、自分が主宰するイスラム教会において

コーランの暗唱をするように、とすゝめてくれたのがきっかけでした。こうして彼は全く以前には予期しなかったコーランの暗唱の道に進んだのですが、コーランの暗唱で彼の名声は高まり、宗教の催しのあるたびごとに彼は招かれて方々でコーランの暗唱を披露するようになり、遂には国営のラジオやテレビジョンの放送局が彼をコーランの暗唱のために招いてくれるようになり、遂に彼は名士となったのでした。

又一方、昔彼と同じように机を並べていた友人たちは先生になっていましたが、この人達は清貧に甘んじ、細々とした俸給生活を続けているに過ぎませんでした。ここで私達が考えなければならないことは、彼は当初彼自身の定めた目標をもっていたにもかかわらず、彼をこのような道に進ませ、彼の運命を操った方はどなたであろうか、ということです。コーランには次のようにあります。

－「だが、神が望みたもうた時でなければ、お前達は望むことはできない。神は全知なるお方、慈愛あつきお方である」(76人間の章30)

－「天には、お前達の糧や、約束されているものがある。」

(5 1 まき散らすものの章 2 2)

-「言え、「神のみ心でない限り、私は自分で害することも益することも思うまゝにはできない。」」(10 ユーヌスの章 4 9)

-「言え、「神のみ心でない限り、私は自分で害することも益することも思うまゝにはできない。もし私が、見えないものを知っていたならば、大いに幸福をひき寄せ、不幸に見舞われることはなかったであろうに。」」(7 高壁の章 1 8 8)

(3)

さらに又別の例をお話し致しましょう。この学生は政府派遣の留学生として、或るイスラム教の国へ行って、イスラム教とか、コーランの学問とか、イスラムの法学とか歴史とかその他様々のイスラムの学問をすることになり、勉強に熱中したあまり、自分の祖国へは長い間帰らず、自分の家族とも会うことがなかったのですが、そのうちに父が彼に会いたくなり、遂に父はその息子に会いに来て来ました。息子は他の学生達と共に或る新しい建物に住み、仲間の学生と共に或る一室に住んでいた



のですが、みなが眠り、又父は息子と別の学生の間で眠っていました。

ところが真夜中に、父は天と地とが重なりあい、かなりの時間が過ぎるのを感じたのですが、彼はそれが夢であるか現実であるかわかりませんでした。たゞ彼が自分自身その町の或る病院の中に居て、頭と身体の負傷を治療してもらっているのだけははっきりしていました。そこで彼は、何か起ったのか、と自分に問いかけてみました。その結果彼は、天が地に衝突したのではなくて、自分の息子が他の学生達と一緒に住んでいた建物が夜中に破壊され全員が死亡し、彼だけが助かったことを知ったのです。

彼の右に居た息子も死に、左に居た学生も死に、まん中に居た彼だけが助かったのです。何とこれは奇妙なことでしょう。何とおどろくべき運命のいたずらではありませんか。ここで考えなければならないことは、他の人々を死に到らしめ、彼だけを助けられたのはどなたの思召しなのか、ということです。彼自身が、彼の右に居た者よりも又左に居た者よりもこの地上に生存するにふさわしい人だから助かったのでしょうか。又このようなこ

とは何か特別のさだめがあるのでしょうか。このような結果に到らしめた計画が別にこの世界には存在しているのでしょうか。私達はこのようなさだめ、このような計画を考え出されている方について思い到らなければなりません。コーランには、「神は、定めの時が来てからは、いかなる者にも猶予をお与えにはならない。」(6.3 偽善者どもの章11)とあります。

#### (4)

次には測候所の人々のことを話しましょう。この人たちは風がどのように吹くか、雨が降るか、地震が起るか等についてきわめて精密に測定し、次いでその結果を新聞に発表し、ラジオやテレビで風雨の時間や場所等を放送しています。そこで人々はこれに基づいて様々の準備をしますが、しかしこれらの観測結果はあたらないことがしばしばであり、風は全く反対の方向から吹いて来たり、又全く別の方向へと吹いて行きます。その方向は変り、測候所の人々が予告した以外の場所で雨は多く降り、この雨によって大地が生き返り、又別の地方ではこの雨が降らなかつたためにかんばつの被害にあうことになり

ます。又海では或る船は進み、別の船は沈むこともあります。河川は無事で、海があふれることになります。或る町々は破壊されますが、又別の町々は平隠です。

このようなことは、全く何ものによっても思い到らなかったことであり、観測の結果においても表れ得なかったことです。測候所の人々も知らず、一般の人々もすべて知らなかったことです。このような結果の裏に何か別の力が働いているのではないかと考えざるを得ません。測候所の人々が観測したのとは別に何か別の、真の観測があり得るのではないのでしょうか。そして又この真の観測をしておられる方があるのではないのでしょうか。コーランには、「福音の風を送って、神の御慈悲をお前達に味わせ、その御命令によって船を進ませ、お前達がみ恵みを求めるようになるのも、神のみしるしの一つである。恐らくお前達が感謝するだろう、とのおはからいからだ。」（30ギリシヤ人の章47）。さらに又コーランには、「まことに天地の創造、昼夜の交代のうちに人々に有用なものを積んで海を走る船のうちに、神が天から降らせ、一旦枯地にした大地を生かして、そこにあらゆる生物をまき散らした雨のうちに、風向きの変りのう

ちに、天と地の間を駆使させられる雲のうちに、分別ある人々にはみしるしがある。」（2牝牛の章164）とあります。

（5）

さらに皆さんは、精密な立派な時計をお持ちでしょう。それらは時間、日付等をアラビア語で、英語で、日本語で示してくれます。このような立派な時計を見て、これらを製造した工場や会社の名前を知りたいと思うでしょう。即ちこの時計の背後には、熟練したメーカーがあり、立派な会社があるにちがいないからです。皆さんはこのようにしてその時計の工場やメーカーを知るようになるのです。又涼しい風を我々に送ってくれる扇風機についてみますと、人間の安全を守るために、少しでも手がふれるとすぐに止るしかけになっているものがあります。特にこれは、何も知らない子供達を危険から守るために作られているものですが、このようなものを見た時に何とこれは行き届いた製品であろうか、そしてこれを作った人はどのような人なのか、何と子供達のことをよく考えていることだ、とおどろき、この工場やメーカーの名

前を誰しも知りたいと思うでしょう。何故なら必ず製品にはメーカーがあるからです。

そこで皆さんは、扇風機を見ると同時にその工場なりメーカーなりを見ているのです。たとえそれらは表面に現れず、目に見えなくとも、これらは頭の中で想像しているのです。これと同様に、すべてのものにはこれを作った人が居るにちがいありません。そこで、私達が星が一杯出ている空を見てみましょう。空には数えきれないほどの星があります。誰もその数を数え切ることはできません。又すべての天体には、地球をも含めて、引力があり、近くのものを引きつける力を持っています。そこで私達が疑問に思うのは、これらの星はお互いをどうして引きつけあわないのか、ということです。又これらのそれぞれの星は、引力が働く固有の領域をもっていて、この領域の外では力が働かないのだと考えるにちがいありません。即ちすべての天体は、それぞれの引力が及ぶ固有の領域をもっていて、全体の星には引きあって衝突しないようにできているのです。もし多くの星が互いに衝突しあえば、この世界は破滅します。しかしこの世界は古来ずっと存在して、その様子は創造主のみしかわか

らないのです。こゝで私達はたずねなければなりません。誰がこのようにつくりにしたのでしょうか。誰が世界の存続を守るためにこのようなくみに作ったのでしょうか。コーランには、「神が地にあるものをお前達のために駆使し、御命令によって海に船を走らせ、お許しなしに地上に落ちないように天を保持し給うことを知らないのか。まことに神は人々にやさしく慈悲深いお方である。」（22巡礼の章65）。とあり、さらに、「いや私は沈み行く星にかけて誓う」（56出来事の章75）、「これこそまことに偉大な誓いである。お前達にわかればよいのだが。」（同76）とあり、さらに、「夜も昼も、太陽も月も、すべて神のみしるしである。太陽や月を伏拝することなく、それらを創造し給うた神を伏拝せよ。本当にお前達が神を崇拝しているというのであれば。」（41説明の章37）とあり、又、「又太陽もある。太陽はその休憩所を求めて運行する。これも力強いお方、全知なる方の掟である。」（36ヤーン・シーンの章38）とあり、次いで、「そして月もある。我らは月が枯れたなつめやしの古枝のように曲って元に戻る迄数々の宿を定めた。」（同39）、さらに又続いて、「太陽

は月に近寄ってはならないし、夜は昼に先行してはならない。各々は天空を泳ぐのである。」（同40）とあります。

（6）

皆さん地球を見てみましょう。その中には山々があり、赤い山もあれば黒い山もあり、白い山もあります。又各々の山の様々な岩の層を見て下さい。岩はそれぞれ形がちがい、色がちがいます。赤い岩もあれば緑色の岩もあり、柔らかい岩もあれば硬い岩もあり、雨が降れば様々な長さの植物がそこから生えて来ます。又樹々は様々なすばらしい形をしており、人間が種を播いたこともなければ又人間が育てたこともないのに自然に茂い繁ってきます。又これらの大地を見て下さい。そこに播かれた植物の種は水を吸い、肥料によって生育し、我々に様々な形、色、味、匂いをもったおいしい果実を提供してくれます。我々はこれらの味を常に賞味しています。又これらの味には甘いもの、少し辛いものもあるし、小さい実もあれば大きい実もあり、丸い実もあれば細長い実もあり、立派な実もあれば劣った実もあります。

人間について見るならば、人種は様々であり、皮ふの色や言語もそれぞれに違います。黄色人種もあれば白人もあり、黒人もあります。顔も丸い人種も居れば細長い顔の人種もあります。それぞれに男と女が居るという点では同じですが、その子供達は皮ふの色や体形や性質や食べ物がちがっています。又動物はそれぞれに身体つきや体形、名前がちがっています。又生活環境は、同じ人種の間でも、そのグループによって体形や皮ふの色が変わってくるのです。

そこで私達は次のような疑問を起すでしょう。このように、それぞれに分けられそれぞれに特色をもたせられた方は誰方なのでしょう。そしてそれぞれが人間に幸をもたらし、人類の生育を快適にされた方は誰方なのかということです。そこには必らず、様々の生物を削られた方がおられるにちがいありません。コーランには、「神が天から雨を降らせ給うのをお前は知らなかったのか。我らはその水で様々の色あいの果実を実のらせ、山々に白や赤や黒の幾多の色あいのすじをつけた。」（35創造者の章27）とあり、又「同時に人間、禽獣、家畜それぞれにさまざまの色あいがある。」（同28）とあり



ます。さらに「地上には接続する様々の地区があり、ぶどう園、田園、なつめやしの木の群生するもの、孤立するものがあり、同じ水でかんがいされている。我らは食べ物としてそのうちの或るものを他のものに優越させておいた。その中には分別ある人々へのみしるしがある。」（13 雷鳴の章4）とあり、さらに、「天地やお前達の様々の言語ならびに皮ふの色あいを創造し給うたのも神のみしるしの一つである。まことにその中には知識ある者へのみしるしがある。」（30 ギリシヤ人の章22）とあり、又さらに、「彼等は頭上の天を見て、我らがこれをどうして創造しかざって見せたかを考えなかったのか。そこにいさゝかのすき間もないことを考えてみなかったのか。我等は天地をうち拡げ、そこに不動の山々を据え、各種の美しい草木を育てた。これは悔悟するすべてのしもべがよく見て教訓を得るようにと思つてのことである。我らは天から祝福の雨を降らせ、これで幾多の庭園を設け、収穫のため穀物を育てゝやった。又重なりあつて実つた背の高いなつめやしを育てゝ、しもべたちの糧とし、さらにこの雨で死地をよみがえらせたのである。人間が復活によって生きかえることとて同じことで

はないか。」(50コーフの章, 6~11)とあります。

(7)

朝になると太陽が東から昇り、一日が始まります。あたりはだんだんと明るくなって人々は眠りからさめ、事務所や工場や会社等へ仕事に出掛けます。又生徒達や学生達は学校や大学へと出掛けます。

又夕方になると太陽は西に沈み、その後夜がやって来て暗闇が広がります。夜には人々は日中の仕事の緊張から解放され、ぐっすりと眠って元気を取り戻し、翌日又立派に仕事ができるように備えます。又夏には日が長くなり、夜が短かくなります。これと反対に冬には日が短かくなり、夜が長くなります。又春と秋には昼と夜がほぼ等しくなります。勿論国により多少は違いますが。

このような動きは、人間にはできないことで、どんなに力があっても、地位が高くてもこのような自然のしくみを変えることは人間には不可能です。季節の移り変わりや夜と昼の別は、たとえ多数決の原理でこれを決めても変えられるものではありません。人間はすべてこのような秩序に従わねばならず、これを変えるすべを何ら持ち

合わせてないのです。即ちこの秩序は或る強力な方によって定められたものだからです。それではこの方はどんな方なのでしょう。このすべてを定められた方とはどのような方なのでしょう。コーラン第28章物語の章第71節～第73節には次のようにあります。

—云ってやれ、「神がお前達の上に夜を最後の審判の日迄続くようになし給うたなら、神以外のどの神が、お前達に光を与えようか。お前達には聞こえないのか。」

—云ってやれ、「神がお前達の上に昼を復活の日迄続くようになし給うたなら、神以外のどの神が、お前達に休息すべき夜を与えようか。お前達は考えてみたのか。まだ見えないのか。」

—神は、その慈悲心から、お前達が休息し、神の恩恵を求められるよう、昼と夜を創造された。恐らくはお前達が感謝するだろうとのお計らいからだ。

(8)

又人は結婚し、子供を生んで自分の名前を名乗らせ、自分の死後にその地位を継がせ、財産を相続させてその名を残そうとします。諺にもあるように、「息子をもつ

者は死なず」なのです。そこで妻が妊娠すると、夫婦及びその家族は大いに喜び、みんなは新生児の生まれるのをたのしみにし、誰もがよい名前をつけようとあれこれ考えるものです。ところが奥さんが女の子を生むと、みんなはがっかりし、この新生児を迎えるのに複雑な気持ちになります。又ほどなくこの奥さんは第2番目の子供を身ごもります。しかしみんなは、今度こそは男の子が生まれてほしいと願いますが、今度も又生まれて来たのは女の子でした。みんなの失望落胆は前よりも倍の激しさでした。夫は怒って、「今度又女の子を生むなら離婚だ。」と云います。かの国によくあることなのですが、夫はもう一回同じことが繰り返されるならば必らず別れよう、と決心します。その後妻は妊娠しましたが、彼女は胸に手をあて、心配げに、今度こそは、この家族と別れなくてもよいように、男の子であって欲しいと願うのでした。遂に予定日が来て、子供が生まれましたが、何とそれは双子で、しかも女の子ばかりの双子だったのです。子供の生まれるということはすばらしいことです。しかし何人も、これに関する選択はなし得ないのです。男も女も、定められた運命にはさからえないのです。彼女は全く予

想だにできなかった結果におどろいたのです。即ち運命は、彼女が思いめぐらしたよりはるかに別の道を辿ったのです。彼女の予想以上の結果をもたらし、かえってみんなは彼女の前で小さくなってコーランの次の章句に耳をかたむけたのです。「天地の主権は神に属する。神はみ心にそって創造され、み心にかなう者に女の子を授け給うかと思えば、男の子を恵み給う。」（第42協議の章第49節）、「又、男女を夫婦となし、欲し給う者を不妊とおきめになる。まことに神はよく知るお方、よくおできになるお方である。」（同第50節）

(9)

さて今度は人間の身体や四肢とそのはたらきについて考えてみましょう。それらは何れも動物や昆虫等には備わっていない素晴らしいはたらきを備えています。即ちそれぞれの人体の器官がそれぞれのはたらきを最も立派に果すようにつくられており、生活を助けているのです。

先ず頭には脳があり、思考の中樞を司り、外側には毛髪があつて頭全体を保護し、又人間の装飾ともなっています。

次に顔には、見るための両眼、聞くための両耳、においをかぎ、呼吸をするための鼻があり、口には歯があって食物を噛み砕き、消化を助けています。又舌は言葉を発し、食べ物をのみ込むのを助けるものです。

首は頭と身体の両部をつなぐ器官です。

胸には呼吸と血液浄化のための臓器がある。そしてあばら骨でおおわれており、外部からの打撃を防ぐように作られています。

腹部には胃、肝臓、脾臓、腸等があって種々の食物の消化を助けている。

両腕は手からつらなって、働くため、又自衛のはたらきをする。手には五本の指があって、その各々には先端に爪がついています。

肢にはもゝ、ひざ、脚、足先から成っており、足先には五本の指があり、各々の先端には爪がついています。人間はこの両肢を使って、自分の行きたい所へ行くのです。

又この他に、食べた食物の残滓を体外へ排出するための別の器官がついており、排泄器を成している。

心臓は肉体の最も重要な器官の一つで、胸の左

側に在り、手の一握りのような小さなものであるが、生命は心臓に依存して生きているのです。心臓が一瞬でも停止するならば、その人は生きていられないのです。

このように人体はきわめて秀れた機械であり、精密に作られており、強靱な構造をもっていますが、それは鉄や鋼鉄でできているわけではなく、肉と血と皮と汗と骨とでできているのです。又人間の肉体には精神が宿っていて、これが運動や行動を押し進める原動力となっています。この機械は、これを作った方が考えた通りの法則にしたがって使用するならば100年以上も健全に活動させることができるのです。しかしこの機械は、どんなに力もち、どんなに高度の科学もち、どんなに発明力を駆使しても、いかなる機械を働かせても、誰にもこれを作り出すことはできないのであり、又誰もこの生命をよみがえらせることはできないのです。

そこでこのような構造体を作り、設計し、素晴らしい形に整え、美しい形にしたのはどなたなのでしょう。考えてみれば、地球上のすべての学者が最高度の科学に到達したとしても、すばらしいどんな発明を行ったとしても、今に至る迄一匹のはえ、一匹の蚊すら作り出すこ

とはできていないのです。そこでコーランには、「もし蠅が彼等から何かを奪っても、それを取り戻すこともできない。願い求めるほうも、願い求められるほうも、どちらも脆いものである。」（第22章巡礼第73節）とあります。そこで、この世の中には必ず選ばれた、創造する力を持った方、即ち創造者があるにちがいないのです。そしてその方こそ実は神（アッラー）なのです。そこでコーランには、「お前達の中にもある。それでもお前達は見ようとししないのか。」（第51章まき散らすものの章第21節）とあり、又、「彼らは人間を最も美しい姿に創った。」（第95いちじくの章第4節）、さらに「我らが与えてやったではないか。二つの眼と」（90町の章第8節）「一つの舌と二つの唇を。」（同第9節）とあります。

(10)

男と女は結婚し、そして子供を生み、またその子供たちは大きくなって結婚し、さらに自分たちの子供を生んでいきます。しかし溯りますと、これとは反対に、その男の人の父親は、その男の人が生まれる前に結婚したの



です。同様に祖父が結婚し父を生んだのです。このようにして私達はずっと溯って祖先へ祖先へと近づくのですが、それには終りがありません。私達はそこで輪廻(りんね)と云うものに帰るのです。しかし、すでに知られるように、終りのあるものには常に始まりがあるにちがいありません。すなわち私達はこの展開によって始まりへと到達することができるにちがいありません。すでに御承知のように、人間の営みの最初はアダムでありイブでありました。それではアダムは自分自身のみで生きていたのでしょうか。私達は彼自身で存在し、生命を与えたのだと知ることはできません。また現在に至るまで近代の科学を以ってしても、さまざまの物体の中のある物体、又はさまざまの存在の中のある存在が自然に作られ、生命を与えられたのだということをまったく証明していません。近代の科学も生と死との現象の前には何と手をこまねいていなければならないことでしょう。学者たちはどんなに努力し、医者と協力し、死者に生命を与え、死者に心臓を移植し、肝臓を移植し、他人の肉体の一部を移植しようと努めてきたことでしょう。しかし死というものは決定的なものです。彼らは人間の寿命をた

だほんのわずかばかり長びかせることができたにすぎません。そしてその後、いずれ、人間は死んでいくのです。即ち、この世の中には勝れた決裁者の処置と英知が働いているにちがいありません。そしてどんな英知もこの決裁者の英知に及ぶものはなく、どんな処置もこの方の処置にはかなうものではないのです。いかなる処置も、いかなる知恵も、この主と主の意志には従わねばならないのです。そしてこの第一番目の人間を創造された方がいらっしゃるにちがいありません。人間は猿の発達した者であるとする、その発達した猿を創造した方は誰なのか、又猿は下等な人間であるとするなら、この下等な人間を創造したのは誰なのでしょう。

この力、この裁決は偉大なる最初の創造主に因るものであり、それはすなわち神、アウラーなのです。コーランには、力ある創造主の言葉が述べられています。即ち第50カーフの章、第16節には、

「我らが人間を創造したのだ。人間の魂が何を囁いているのかぐらいは知っている。我らは人間のけい動脈よりも人間に近いものである。」

とあり、又第52章、山の章の第35節には、

「彼らは無から造られたではないか、あるいは彼らが創造者とでも云うのか。」

さらに、

「天地を自分達が創造したとでも云うのか。いや彼らにはどんな確信もないのだ。」とあります。

(11)

では次に、人間の子供がどのようにして、母の胎内でつくられ、どのようにして完全な人間となるかを見てみましょう。

男女が接触すると、男性の液が女性の液と混ざり合い、精子(Sperm)となる。そして男性の液から骨や神経ができる。すなわちそれは混じった液だからである。また女性の液からは血や肉がつくられる。すなわちそれは細い薄い液だからである。この精子は、三つの黒い精子の中に宿っている。すなわちそれらは子宮(Matrix)、胎盤(Placenta)―これは胚を守る覆いである―と腹(Abdomen)である。これらは子供を作るために保護的な環境をつくるのである。この精液は40日生き続けて、一つの凝血(Clots)となる。これは血液のかた

まりであって、40日間生き続ける。またその塊は肉塊(Lump)になり、それは肉の塊りで、はっきりした形もなく、不定形なものであります。このようにして核は40日間生き続け、そこに精神が入り人間の頭、両手、両足とそれらの骨や神経等を持った人間の形を形成します。それから、これらの骨は肉によって覆われ、又別の生き物となって動き始めます。このようにしてそれが成長して、出生し、最も整った姿で、美しい形をした完全な人体となるのです。こうして人体は音を聞く事ができ、物を見る事ができ、動く事ができ、働き、そうして又別の物を作り出す能力を持つのである。その後、この人間は神に感謝する者となるか、又は神を信じない者になるか、のどちらかとなるのです。

さてこのような創造をなすことのできる方はどなたなのでしょう。又このような液から完全な人体を創りだせる方はどなたなのでしょう。これまでにわかっている事と云えば、科学とか学者とかはこのような人間とか動物とかの肉体や精神を作り出す事はできなかつたし、又これからもできないということです。したがって、この宇宙には人間を思いのまゝに創造することができる力を持

った創造主がいらっしゃるに違いないのです。この創造主が自分の思いのままの人間を創りあげることができるのです。そしてそれがすなわち、神アッラーなのです。コーランの第39章集団の章第6節には、

「神はお前達をそれぞれの母の胎内で3重の暗闇の下で次々と創造された」

とあり、さらにコーラン第82章裂けるの章の第6節には、

「おゝ、人間よ、何がなんじを、慈悲深い主からまどわせたのか」

#### 第7節

「汝を創造したまい、形を与え、整えられ」

#### 第8節

「み心のままに、汝に姿を与え給う方ではないか。」とあり、

さらにコーラン第23章12節には、

「我らは土の精髓から人間を造った。ついで、それを一滴として堅固な宿所に置き」

#### 第14節

「その一滴から凝血を作り、そして凝血から肉塊を作

り、肉塊から骨を作った。それから骨に肉を着せ、こうして彼を一個の他の生物として作りだした。最もすぐれた創造主なる神が崇められん事を！」

とあります。

(12)

次には動植物界の神秘に触れましょう。

海の中の或る種の魚は、木に登る事ができます。すなわち、もし水が乾いてなくなってしまうと、この魚は地面の上にはい上ってきて、高い木に登ってあたりを見廻し、水のある場所を見つけると、すぐに木を下りて、その水のある場所へ行って泳ぎ始めるのです。また、真暗な海底にいる魚の或る者は、斑点が体についていて、そこから色々な色彩を持った光線を発して自分の泳いでゆく道を照らしだしているというではありませんか。なんと神秘的な働きをするものではありませんか。

今度は植物の世界に目を向けますと、或る植物は虫を食べると云うではありませんか、すなわち、甘い匂いの良い物質をだし、それでもって虫を自分の方へひきつけるのです。そこで、虫達がやってきて、この植物の葉の

上に止りますとすぐにこの虫を捕えて、血液を吸ってしまい、それからほうり出すのです。又さらに、虫の世界では、或る虫は厳しい冬の寒さでは生きてゆけません。そこでこの虫は冬がやって来ますと、自分のまわりを強固な織物でまとい、寒さを寄せつけないようにするのです。そして冬が過ぎてしまうまで木の枝にしがみついて、やがて夏が来て良い気候になると自分の着物を脱ぎすて、あちこちへと再び飛んで回るので。このような事を御存知でしょうか。これらはほんの一例で、これに類する事は皆さんも多く御承知であるに違いありません。このような事をよく観察しますと、何の武器もなく、又気候がよくなった事を知る時計もなく、飛びだす生物の事を考えますと、私達はどうしても、この世の中に偉大なる創造主がいるということに思いあたるに違いありません。

コーランの第87至高なる御方の章の第一節には、

「たゝえまつれ汝の至高なるお方の御名を、

第2節

「創造し、整え給うお方。」

第3節

「決定し、導き給うお方。」

とあり、又コーラン第20章の第50節には、

「私達の主は万物にそれぞれの形相を与えた上、これを導き給うたお方です。」

とあります。

(13)

次のコーランの章句を読み、その意味を考えて下さい。

(一) 神はお前達の目に見える柱なしに天を持ち上げ給うたお方である。それから神は玉座にあり、日や月を駆使して、それぞれ定められた期限で、走らせ給う。神は万事を取締まり、お前達が主に会う事を確信するようにと、緒々のみ印を明示し給う(第13章、雷鳴の章第2節)。

神は、大地を繰り広げて、ここにゆるぎなき山嶽と諸々の河川を置き給うたお方である。また神はあらゆる果実について、雌雄両性に造り、夜をして昼を覆わしめ給われた。その中には、反省する人々へのみ印がある(同第3節)。

(二) 神は天から雨を降らせ給うお方、それはお前達の飲み水にもなり、お前達の家畜の飼料となる樹木もそれで



育つ（第16章蜜蜂第10節）。

またそれで、穀物、オリーブ、ナツメヤシ、ブドウ、その他あらゆる果実をお前達のために、生ぜしめ給う。まことにその中には思慮深い者へのみ印がある（同第11節）。

またお前達のために、夜と昼、日と月を駆使し給うた。諸々の星も神のご命令に服従している。まことにこの中には、分別ある者へのみ印がある（同第12節）。

また地上において造り給うた色とりどりのもの、その中には注意深い者へのみ印がある（同第13節）。

また神は、お前達が鮮魚を取って食べ、服飾に用いるものを採集することができるように、海を役立て給うお方である。また汝は、かれの恵みを求めて海を進む船をみるであろう。おそらくお前達は感謝を捧げるであろう（同第14節）。

また神は、大地がなんじらを乗せたまま動揺することがないように、その上に山々を据え給うた。また河川や道路をも。おそらくお前達は正しい道に導びかれるであろう（同第15節）。

さらに、道標となる物をも。また星をたよりに人々は

正しく導かれる（同第16節）。

このように創造し給うお方が、何も創造できない者と同様であろうか。これでもなんじらは気づかないのか（同第17節）。

たとえお前達が神の恩恵を数えたてようとも、到底数えつくすことはできない。まことに神は寛容にして、慈悲深いお方である（同第18節）

(三)また汝の主は、蜜蜂に黙示して云い給う。「山でも木でも、人間が建ててくれるものでも、それを巢とせよ（第16章蜜蜂の章、第68節）。

そしてあらゆる果実を食べ、汝のために用意された平坦な主の道にそって舞いなさい」その腹から人々のために薬になる色とりどりの飲み物が出る。思慮深い人々にとって、これこそみ印である（同第69節）

(四)神が雲を駆りたて、これを集め、これを塊りにし給うのが汝にはわからないのか。その間から雨が降り出すのが見えるだろう。神は天から雹をはらんだ山なす雲を落下させ、欲する者にはそれで打ち、欲する者にはそれを避けしめ給う。稲妻のきらめきはほとんど目を奪わむばかりである（第24章光の章、第

4 3 節)。

神は夜と昼を循環せしめ給う。具眼の人々には、この事の中に教訓がある(同第4 4 節)。

神はあらゆる動物を自ら造り給うた。その中には、腹這いで歩むものもあり、又中には2本の足で歩むものもあり、又4足で歩むものもある。神は欲し給う物を何でも造り給う。まことに神はあらゆる事がお出来になるのである(同第4 5 節)。

我らは明らかな印を下した。神は欲する者を正しい道に導き給う(同第4 6 節)。

因神はお前達を土から創造し給うた。ついで、一滴の精液により、創造して男女の対となした。いかなる女も、神の知り給う事なくしては、孕むことも産むこともできない。又いかなる長寿者も経典によらずしては、寿命を長らえることも、短縮することもできない。しかし神にとっては、これらはいとたやすしみ業である(同3 5 章創造者の章、第1 1 節)。

二つの海は同じではない。一方は美味で甘く、飲むに心地よい。他方は塩辛くにがい。しかし汝らはそのいづれからも、新鮮な肉を食べ、身につける装飾品を採取す

る。汝は海の中を進む船を見るであろう。それはお前達神の恩恵を求めためである。おそらくは、お前達が感謝するだろうとお計らいからだ（同第12節）。

夜を昼に入れ、昼を夜に入れ、太陽と月とを従え給えば、各々は定め周期で運行する。このようなお方がお前達の主なる神である。このお方にこそ主権は属する。この他にお前達が崇拝している物など、ヤシの実の皮さえどうすることもできない（同第13節）。

たとえお前達がこれらを崇拝しても、これらはお前達の祈りを聞きはしない。またたとえ聞いたとしても、応答するようなことはない。審判の日には、これらはお前達が神に併置したことにさえ背を向ける。よく通曉し給うお方のように、お前達に消息を伝えて下さるものはないのだ（同第14節）。

穴神のみしるしの一つを汝は荒涼たる大地にみる事ができる。我らが一度その上に雨を降らせば、直ちに活動を始め、生成する。大地を蘇らせ給うものは死者を蘇らせ給うお方である。まことに神は万事に力を及ぼし給うお方である（第41章説明の章第39節）。

(ト)我らは天を威力で造った。我々は広大に拡げるもので

ある（第51章まき散らすものの章第47節）。

我らは大地を拵げた。何とみごとに拵げたことだろう（同第48節）。

我らは又、汝らが教訓を得るようと思つて、あらゆるものを対にして造つた（第49節）。

「よつて汝ら、神のみ許に身を寄せよ。

私は神から遣わされた明白な警告者である（同第50節）。

神に、他のいかなる神をも併置してはならない。私は神から遣わされた明白な警告者である。」（同第51節）

（汝の主にかそ執着がある（第53章星の章第42節）。

笑わすのも、泣かすのもこのお方（同第43節）。

死なすのも、生かすのもこのお方（同第44節）。

男女の組合せを創造し給うのもこのお方（同第45節）。

一点の精液を注入することで（同第46節）。

もう一度創り直すのもこのお方（同第47節）。

富裕とし、財産を築かせるのもこのお方（同第48節）。

狼星の主もこのお方（同第49節）。

昔、アードを滅ぼされたのもこのお方（同第50節）。

サムードも、跡形もなく（同第51節）。

その昔、極悪だったノアの民も（同第5 2 節）。

転覆した諸々の都市も（同第5 3 節）。

そして、覆うものがその都市を覆った（同第5 4 節）。

一体汝は主のみ恵みのどこに異論を唱えるのか（同第5 5 節）。

(1)我らは空の彼方にも、彼らの間にも、これが真理であることがわかるまで、みしるしを示してやろう（第4 1 章説明の章第5 3 節）。

#### (14)

そこで、すべての物にはこれを創った方が居られる。この存在には、創造者がいるのです。そこで、私達は神は存在すると云いきれるのです。それでは、神、アッラーという言葉はどういう意味でしょうか。すなわちそれは礼拝に値する唯一の方という意味です。この世のあらゆる存在は、この方に従わねばならず、又この方のなされた御仕事の美しさや徳の高い事に感謝しなければならず、又さらには、この方にのみ、私達の望みを求めるべきりっぱな方なのです。それから同時に私達はこの方の偉大さ、知識の深い事、知恵のすぐれている事、この方

の大きさについて考えねばなりません。

たとえば、時計を作った人は、この時計の中にある装置や機械よりもこれに関する知識が深いに違いありません。小さい事も大きい事も知っているに違いありません。そしてその知識と力でもって、これを利用する事ができ、又この時計が止った時には、それを修理することができるのです。

同様に、これらの偉大な機械を作った人の知識や力というものは、その機械そのものよりも深く、機械の中にあるすべてのメカニズムについて知っているのです。それを動かす事ができ、又それが止った時には、修理することができるのです。大型のコンピュータを作った人は、その中にあるすべての部品やその中の構造を完全に知っていて初めてこれを動かす事ができ、又故障した時にそれを修理する事ができるわけでありましょう。このようにして作られたすべての物には、それを作った人がいるに違いありません。そこで私達がこの存在には、これを作った人があると信じていたならば、この知識や知恵や力というものはその存在自体よりも、大きなものになるはずであり、精密な事に通じるに違いありません。そし

てこの存在を自分の思う通りに動かす事ができるのです。故に私達は「神は偉大なり（アッラーフ・アクバル）」、「神は誠によく御存知な方でいらっしゃる。」と云うのです。製品ができる以前に製作者がいたとするならば、神はこの世の中が存在する以前にすでに居られたはずであり、私達がこの世の中がどれ程前に作られたのかという事を知らないとしても、私達は次のように云う事ができます。作った人、それは神、アッラーであり、いとけ高く、いと有難く、この神は初めからいらっしゃり、それに先立つ者はいない。神の後に又神はないのであります。

もし、あなたが前計を作った人、機械を作った人、コンピューターを作った人を知っていたなら、視界の中に入るでありましょう。目は、顕微鏡のように遠い所を見ることができます。しかし、どんなに距離があっても、どんなに遠くを見る事ができても、それは限られています。すべて目に見える物は目の視界の中に入ってそれを見る事ができます。しかし、この目というものは、限られた視界の物しか見えません。従って、私達は神を見る事はできません。というのは、神は目で見ることができ



る視界的な物質でなく、それを捕える事も、見る事もできないのです。神は、この世の製作者であり、それをとられる事はできないのです。すなわち、私達は、神を見、感ずるにあたっては、神が作られた物を通してしか、可能ではないのです。コーランの第6章、家畜の章第103節には、

「人の目では、神はとらえる事はできないが、神の目にはすべてが見える。神は優しいお方、熟知し給う方である。」又さらに、コーラン第10章、ユースの章、第5節には、

「神は太陽を輝きとし、月を光とし、お前達が歳月の計算を知るように、その運行を定め給うたお方である。神がそれを作り給うたのは、真理によるに他ならない。理解する人々には、この様にみしるしを詳しく説明し給う。」とあり、

「夜と昼との交替のうちにも、神が天地の間に作り給うたうちにも、敬虔なる人々にはみしるしがある。」

(同第6節)

そこで、皆さんはこの世の中にはそれを作った方がいらっしゃる事を信じていただけた事でしょう。この方は大変偉大な、りっぱな方で、この世の中以上に偉大なのです。この製作者の知恵と力と知識は、この宇宙よりも大きいのです。そしてこの知識というものは、詳細にわたっており、目で捕える事もできず、目に見える事はできないのです。そこで私達は次の問題として、それではどうして神はこの世を創造されたのでしょうか、という問題に行きあたります。

人間は時計を作りましたが、それは時間を計り、自分達の今の時間を知るためであります。そしてこの時間によって、人間はさまざまの営みをしてゆくのです。又人間は機械を作りましたが、それはさまざまの仕事に使うためであり、生活を快適にし、私的、公的生活を問わず、自分の必要とする道具を作るためです。又人間はコンピューターを作りだしましたが、それは人間が計算をする時間を節約するためであり、間違いがなく、仕事を遂行するためでもあります。このようにして、何かある物を作る人は、自分の望む様にそれを使うのであり、作られ

た物は、またこれを作った人の意志から離れて働くようになります。

もし、以上の通りであるとしみますと、この世を作られた方は、何かある特別の目的のために、又何か特別の仕事をするために、これを作られたのに違いありません。それでは、この世の目的とは何でしょうか。人間創造の目的とは何でしょうか。コーランの第51章、まき散らすものの章の第56節には、

「わしがジンや人間を作ったのは、わしに仕えさせるためである。」とあり、さらに、

「余は彼らに糧を求めたり、食べさせてもらおうなどとは考えていない」（同第57節）。

「誠に神こそは、糧を与え給うお方。強大無双の力を持つお方である。」（同第58節）又コーラン第2章、牝牛の章、第30節には、

「さて汝の主が、『わしは地上に代理者を置こうと思う。』と天使達に云い給うた時、『私達があなたの栄光をほめたゝえ、あなたを崇めておりますのに、どうして害をなし、血を流す者を地上にお置きになるのですか。』と皆が云った。神は答えて云い給うた。『わしは、お前

達の知らない事を知っている。』とあり、さらに、

「かくて神は、諸々の名前をすべてアダムに教え給い、それから天使達にそれらを示して云い給うた。『もしお前達が真実を語っているなら、これらの物の名前をわしに告げよ。』（同第31節）

「天使達は云った。『畏れ多い事。あなたがお教え下さった物の他は、私達は何の知識もありません。誠にあなたは全知にして、聡明なお方です。』（同第32節）

「そこで神は云い給うた。『おおアダムよ、彼らにそれらの名前を知らせてやれ。』彼がそれらの名前を皆に教えてやった時、云い給うた。『わしがお前達に云った通りではないか。わしは天地間の見えない物に通暁し、お前達が現す事でも、隠す事でも、すべて知り尽している。』（同第33節）

「神は汝らに、天地にある物すべてを服従させ給うた。」（第45章 睨くの章第13節）

すなわち神は人間を創造し、地上におけるその後継者とされたのであり、人間に神の知恵を実行させ、神の命令に従わせ、神が明らかにした様に、崇めさせ、その後でさせようとされたのであり、こうして始めて、人間に

食物を保障されたのである。神は人間にこの世にあるすべてを与えられて、人間の生活が快適になる様に使ってもよいとされたのである。かくて、神は人間に命令を下され、人間がこの世の存在をどのように使うかを知らしめられたのである。この世が存在するという事は明らかに、創造者がいるという事を示しているのであり、もし創られた物がなければ、これを創った人もわからないであります。そこでコーラン第45章、跪くの章、第36節に

「よって神に栄光あれ、天の主、地の主、万有の主なる神に、」とあり、さらに同第37節には、

「天と地の偉大さは、神のもの、それは力強いお方、聡明なお方である。」とあります。

(16)

ここで、あるいは皆さんの中には、次のように考えられる方があられるかもしれません。すなわち、このようにさまざまの生物を持ち、さまざまの方向を持ち、さまざまの形をして色々な色彩を持ったこの偉大なる宇宙という存在が創られるためには、多くの神様を必要として、さ

まざまの神様がある方面を受け持ったのではないかと考えられるかもしれません。確かに、古くは人々は、例えば、戦争の神様であるとか、あるいは、愛の神様であるとか、美の神様であるとか、というものを信じていたのですが、この点についてさらに深く考えてみましょう。

私達は、よく見聞します事に、社長がたくさんいる会社というものは、すぐに倒産してしまいます。たとえ、その会社が長い歴史を持っていても、それらの社長の間には、争いがおこるものであり、一人の社長がこれをしようと考えれば、又別の社長がそれとは違った事をしようとするものであり、とうとうその結果、争いが起って会社をつぶすことになるのがせいぜいです。又、船について考えてみますと、危険をさける方向へ向って船が進んで行くためには、船長は一人でなければなりませんし、そこで初めて安全な方向へ到達することができるのです。もし、船の中に船長が2人居れば、船長が一人の時とまったく同じように、安定した航海を続けられるでしょうか。おそらく、船長が2人居れば、その2人の間の考え方の違いによって、船は混乱をしてしまうでしょう。そして2人が議論をしている間に、又、争いを起し

ている間に、船は止ってしまったり、安全な航路からはずれてしまったりして、船客に危険がふりかかるに違いないのです。この宇宙についても同じです。この宇宙は、何億年という年月の間も存続し、しかるべき方向へと進んで来ました。そして、宇宙には強い定りがあって、そのために、生物は生存を保障されているのです。宇宙の主が宇宙の終末を許したとしても、生存は続きます。宇宙はいつ始まり、いつ終るのかという事は誰も知りません。そしてこれを知るのは、生活のすべての必要品を用意しこの地球に備えて下さった創造主のみなのです。

そこで、この存在の主は、ただ1人であって、仲間はいないのです。そしてこの主が、思うがままに、行動をされるのです。さらに、主には仲間がないばかりでなく、主には子供もなく、妻もなく、父もなく、母もないのです。もしそんなものがあれば、人間と同じになり、人間の弱点を持ち、欲望を持つことになります。コーラン第112章真髓の章には、

「一、家（これぞ神にて唯一者）二、神にして永遠なる者、三、生まず生まれず、四、一人として並ぶ者はない。」

とあります。又、第47章、ムハンマドの章第19節には、

「よって、神の他に神のない事を知るがよい。」さらに、第21章、予言者の章の第22節

「もし神以外に天地の間に神々があるとすれば、天地は崩壊するであろう。それ故、彼らの述べているようなものとはかけ離れている王座の主なる神を称えよ。」

さらに第23章、信ずる人々の章の第91節には、

「神は子をもうけ給わなかった。又ともに並ぶいかなる神もない。もしそうなら、どの神も銘々の作ったものを擁して、互いに他を制することであろう。彼らの述べるところを超越し給う神に栄光あれ。」とあります。

又、コーラン第3章、イムラーン家の章、第64節には、

「云ってやれ、『經典の民よ、我らとお前達の間は何の差別もないみ言葉の所に来るがよい。我らは神以外の物を崇める事なく、何物をも神に併置する事なく、又、神をさし置いて、お互い同志を主と呼ぶ事もないからである。』もし彼らが背を向けるならば、『我らが帰依者である事だけでも証言せよ。』と云うがよい。」とあり



ます。

(17)

知性は思考であり、行動の機械である。しかし、知性は物事に対する健全な思考を育てるように努めなければならない。我々は現在の文明開化と開発の時代においてさえも、知性を迷わせ、より良い物を忘れさせ、より良い物とは反対の想像をかきたてる物が多くあり、又、物事をより良い方向へ運ぶべき事を阻害している多くの物があります。そこで、私達は正しい方向へと導き、物事の真実を見通させる教師を必要としています。この世の創造者、この人間の創造者の知恵は、これを崇めるべく、その人種とその言語による教師を選ぶようにさせたのである。教師は導き、教え、神の意志を伝える者であり、この宇宙には、礼拝し、崇拜し、服従しなければならない主の存在することを教えている。神は、これらの教師達に教育計画を伝える必要がありました。すなわち、この教育計画とは、それは、使命であり、神から下された経典であり、いつの時代の要求にも一致し、いかなる場所でも、人間の知力に相応しいものであります。それはさまざまの教

育課程におけるカリキュラムと同じで、人間の知性の成長につれて、次第次第に進んで、その間に礼拝の義務、生活状況を教えるものであり、これらは神への唯一信仰と並行して、行なわなければなりません。

人類の文明はアダムとイブの創造で始まり、彼等二人は多くの子供を生みました。そしてアダムは最初の教師でした。アダムの教えは、「アッラー以外に神はない。」ということで、この教えはずっと最後の教師迄続いたのです。勿論当時はまだ人間の頭脳が未発達で、これに見合うような手心が加えられたのですが。その後多くの使徒即ち教師がアダムに続きました。これらの人々は過去の人の後にどんどん現れ、その教えは人々にふさわしいものであり、礼拝や行いの方面からはその後の人達にとってふさわしくないものでしたが、根本の教えである「アッラー以外に神はない。」という点で変わりはありませんでした。このようにして我々は多くの使徒即ち先師を見ることができます。それらの人々のお名前を列挙しますと、

アダム

アダム、イドリース、ノア、~~アダム~~、サルハ、イブラーヒーム、イスハーク、イスマーイール、ロト、ヤアコー

ブ、ユースフ、シャイバー、ムーサー、ハールーン、ダーウード、スライマーン、アイユブ、ユニス、ザカリヤ、ヤハヤ、イーサー、ムハムマド等の方々です。勿論この他にも多くの先師がありました。又それぞれに人類のそれぞれの教育段階における先師であり、神が聖典や又経典の中で下された教えに従って教えられたのです。そこでこれらの、神から下された経典とは、イブラーヒームの書、モーゼの書、旧約五書、ザブールの書及びコーランです。

どの使徒もみな先輩の使徒をたゞえ、後輩の使徒に接してこれを援助したのです。どの使徒の書もみな他の使徒の書により補われ、完全なものとなって行ったのです。即ち後の使徒は先の使徒の書に然るべき事柄をつけ加え、新しい時代の精神を吹き込み、礼拝や取り引き関係に於いて人々の可能性をつけ加えたり、人々の生活にふさわしい事柄をふやしたり、人々の宗教や現世及び来世に於いての幸福をねがって来たのです。コーランには、「神が予言者たちと契約を結び給うた時のこと。『わしがお前達に与えるものは、啓典と知恵である。その後で、お前達のもっているものを確証する一人の使徒が現れるで

あろう。お前達は必ずや彼を信じ、彼を助けなければいけない。』又云い給う。『お前達はこの条件でわしの重荷を受け取ることを承諾するのか。』彼等は、『承諾致します。』すると、『それなら証言せよ。わしもお前達と共に証人になろう。』と云い給うた。』（第3章イムラーン家の章第81節）とあります。

(18)

実は神からコーランが下されたのは人類にとって最後の教えの段階ででした。即ちコーランは最後の予言者に下されたのです。即ち人間はすでに知能の点で、思考能力の点で、もはや教師を必要とせず、又これ以上の教えを必要としない段階に達していたからです。そこでコーランが下され、それは以前のすべての教えを含んでいると同時にさらに人間の幸福のために現世及び来世において必要とするものを加え、又人間の能力にふさわしいものを加えたのです。コーランには、「神は各人に能力以上の負担を負わせ給うことはない。自分のかせいだものが自分のためになり、自分のかせいだものが自分に仇をなす。』（第2章牝牛の章第286節）とあります。こ

の教えこそが「イスラーム」なのであり、アラビヤ語でイスラムとは - ムスリム即ちイスラーム教徒とは、自らの事柄を神のみにしかゆだね（アスラマ）ない者であり、又神以上の力がこの世の中にあるとは思わない者であり、そこで初めて彼はすべての状況、すべての行動において神に従う者なのである。従来のすべての使徒はムスリム（イスラーム教徒）でありました。又彼等を信ずるすべての者はムスリムなのです。又コーランはイブラーヒームに就いてふれ - 主が彼に、「帰依せよ。」と云われた時、彼は云った。「私は万有の主へ帰依致します。」（第2章牝牛の章第131節） - イブラーヒームはこのことを子供達に遺言し、ヤコブも又遺言した。「子供達よ、神はお前達の為にこの宗教を選び給うたのである。だから帰依者としてでなければ決して死んではならない。」（同第132節） - ヤコブが死に臨み、息子達に、「私の死後、お前達は何を崇めるのか。」と云った時、彼等が、「私達はあなたの神、あなたの祖先イブラーヒーム、イスマーイール、イスハークの神を唯一の神として崇め、このお方に帰依致します。」と答えた時、お前達は目撃者であったか。（同第133節） -

モーゼは云った。「人々よ、もしお前達が神を信じているならば、もし帰依者であるならば、神にたよれ。」(第15章コーニスの章第84節)

-さて~~コーニス~~<sup>コーカ</sup>が彼等の不信を察知して、「神へ私を助ける者は誰か」とたずねると、弟子達は言った。「我々が神の助力者です。我々は神を信じます。どうか、帰依者であることの証人となって下さい。」(第3章イムラーン家の章第52節)

-即ちムスリムは神のみを信じ、その他の者を信じないのです。又ムスリムはすべての使徒を信じ、すべての教え即ち聖典を信じます。即ちこれらは何れも神からこれらの使徒達に下されたものです。又ムスリムは天使達を信じます。天使とは神が光から創られた輝かしい物体で、神に服従し人間の利益のために行動し、神が力を与えてその使命にふさわしい形をとっています。神は又天使の住居を天に置きました。この天使達の中にガブリエルという方がいますが、この方は神と使徒との間の仲介者をつとめた方です。というのは神は人間には直接に話しかけられることはないからです。コーランには、- 神が人間に語り給うのは、啓示によるか、垂れ幕の後からか、

或いは人を遣わしお許しによって欲し給うところを啓示されるかである。まことに神は至高なお方、聡明なお方である(第42章協議の章第51節)。 - とあります。さらに又ムスリムは、自分が現世で行った善や悪の行為に対して審判の下される日があることを信じています。又この日は即ち「裁きの日」(ヤウム・アルキヤーマ)と呼ばれ、人々はその死後の墓の中からこの審判のためによみがえり、善き行為をなしていた者は天国へ行き、悪い行いをなしていた者は地獄へ行くことを知っています。コーランには - 大地が激しく震動し(第99章地震の章第1節)、大地がその荷物をはじき出し(同第2節)、どうしたことか、と人が言う時(同第3節)、その日、大地はすべての消息を語るであろう(同第4節)、汝の主が啓示し給うたことを(同第5節)。その日、人々は三三五五と現われ、自分の行状を示される(同第6節)。ちり一粒ほどでも善を行った者はそれを見る(同第7節)。ちり一粒ほどでも悪を行った者は、それを見る(同第8節)。 - とあります。

## 最 後 に

皆さん、今迄述べて来たところにより、神が存在し、神は唯一であり伴侶がなく、又使徒ムハムマドは他の使徒と同じように使徒であり、さらにこれらすべてを信じ、今迄お話しして来たことをあなたが信じられるならば、次のように言って下さい。

「アッラー以外に神はない。

ムハムマドは神の使徒である。」

と。又「私はアッラーを信じ、天使を信じ、聖典と使徒を信じ、来世を信じます。」と。そうすればあなたは立派なムスリムなのです。そして神をたゝえなさい。又一方もしあなたがこれ迄お話しして来たことに満足されないならば、神に祈り、神に呼びかけて救いや導きを乞われたらよいでしょう。あなたの心はイスラームの方へと拡がって行くことでしょう。どうかあなたに幸福が訪れ、神の道が開かれますように。

・イスラム暦 1397年シャアバーン月24日

西 暦 1977年 8 月 10 日

東 京 に て

アリー・ハサン・エルサムニー



追 記

この翻訳は東京外国語大学内記良一先生の御好意により実現しました。

ここに心より感謝致します。

Dr, A・H・E L Samny

Ryoichi Naike

1982年10月31日

1912

Dr. A. H. E. S. S. S.

Royal Mail

1912

The Third Edition  
Published by the  
Islamic Society in Japan  
24-12, 1-Chome Uehara  
Shibuya-ku Tokyo  
Tel: 460-6651

(Free of charge)